

二人目の子どもが生まれた男性の生活体験

味坂 朱音¹, 緒方 京², 儘田 徹³, 恵美須文枝²

Men's Experiences Following the Birth of Their Second Child

Akane Ajisaka¹, Miyako Ogata², Toru Mamada³, Fumie Emisu²

近年では、核家族化や働く女性の増加で家庭内の夫婦の役割が大きく変化している。国の取り組みとしても「子ども・子育て応援プラン」や、「イクメンプロジェクト」が発足し、男性の育児参加が強く推奨されている。本研究の目的は、第二子出生後、二人の子どもを育てている男性が、生活の中でどのような体験をしているのかを明らかにすることである。研究方法は、二人目の子どもが生まれて5～12か月目の9名の男性を対象に、半構成的面接を行った。その結果、28のサブカテゴリーから、【仕事に対する取り組み方の変更】、【交友関係の変化への戸惑いと慣れ】、【時間的余裕のなさへの対応】、【人間としての成熟】、【子どもに対する理解とその増大】、【妻に対する理解とその増大】、【家計と居住問題への対応】という7つのカテゴリーを抽出した。男性は父親という役割を意識しつつ、子どもと関わりながら一人の人間として、自らも成長していることが明らかとなった。

キーワード：男性の育児参加，第二子出生，父親，育児生活

I 序 論

近年、核家族化や女性の社会進出によって、父親である男性への家族内での役割も多くが求められるようになり、2010年からは「イクメンプロジェクト」として、父親の育児参加が国を挙げて取り組まれている。また、内閣府の男女共同参画では、2008年から「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」および「仕事と生活の調和推進のための行動指針」を策定し、男女ともに仕事と生活を調和させることが推進されている。これらの対象となる成人期の男性は、エリクソンの発達段階では壮年期（30歳前後～65歳前後まで）にあたる。この時期は、青年期と向老期の中間に位置し、心身ともに充実し最も安定した時期で、家庭でも社会でも中核となる存在で、次の世代を生き育てる時期でもある。しかし、場合によっては、責任が重く、ストレスの多い状況に置かれることもある。このような時期の男性は、子どもが生まれることによって、家庭内での役割、仕事での役割

などが期待されることとなる。

父親になる男性のこれまでの研究には、初めて親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった体験の研究¹⁾ や仕事と家庭の多重役割についての研究²⁾ などがある。また、出産前後の男性について、妻の妊娠による体型や心理的变化に対する夫の心理³⁾ や初めての児の誕生に伴う父親役割行動の調整過程の特徴を見出す研究⁴⁾ が行われている。

以上の研究は、一人目の子どもの父親や妊娠期の父親の研究、父親役割の発達に関する研究などである。子どもをもつ男性を一人の人間として、父親という視点だけではなく、全体的な男性の実像としての視点で捉えた研究は少ない。また、第一子出生で明らかにされていることは、第二子出生についても同様であろうか。2009年の第二子の出生割合は、全出生数の36.5%⁵⁾ となっており、二人の子どもの育児経験をする人の割合は少なくないといえる。そこで、本研究の目的は、第二子出生後の男性が二人の子どもを育てる生活の中で、どのような体験をしているか、できるだけ多角的な視点で明らかにするこ

¹春日井市民病院, ²愛知県立大学看護学部 (ウイメンズヘルス・助産学), ³愛知県立大学看護学部 (社会学)

ととした。子どもをもつ男性は父親という役割のみではなく、一人の男性として二人の子どもの父親になることでどのような変化が起こるのか、その内容が具体的にわかれば、支援の対象となる家族をより理解することができる。また、これを母親学級や両親学級において、予期的指導として加えることによって、家族の適応を支援することができる。

II 研究方法

A県内の子育て支援活動を行っている施設とA助産院の協力を得て、平成23年6月～10月の間に核家族で、二人目の子どもが生まれた男性10名程度を紹介してもらい、半構成的面接を行った。研究参加者の配偶者は、専業主婦とし、子どもの性別を問わず、二人の子どもは第二子出生後から現在まで健康に経過している人とした。なお、本研究の二人目の子どもが生まれた男性とは、身体的に健康で家庭の経済的な基盤を担っている人であり、夫であり、父親であり、社会的なその他の役割をもっている30代前後の人とした。研究参加の依頼については、研究対象者の配偶者（妻）に、研究内容を口頭と文書で説明し、その配偶者から、夫である男性に本研究の趣旨、倫理的配慮を記載した文書を渡してもらい、研究参加者ご本人が、研究概略を理解し同意された場合、連絡同意書に面接日時調整のための電話番号を記入してもらい、返信用封筒を返送してもらった。この方法で強制力が働かないように配慮した。さらに、面接のはじめに再度、研究の概要および倫理的配慮を文書にて説明し、研究同意書に署名をもらい同意を得た。

本調査に先立ち、インタビューガイドを用いて3名のプレテストを行ってインタビューガイドの追加・修正を行った。面接は研究参加者の都合に合わせて日時・場所を決め、インタビューは許可を得てICレコーダーに録音した。面接は対象者の年齢、職業などの生活背景、第二子が出生してからこれまでの体験として、家庭、仕事、友人との付き合いなどのその時々で感じたことや考えたことについて、一人約60分の半構成的面接を行った。

結果の分析は、面接内容の録音から逐語録を作成し、繰り返し読んで全体像を捉えた。そして、研究目的に沿って、重要と思われる部分を研究参加者の語りを大切に抽出し、要約したものを初期コードとし、その相違点、共通点について比較しながら分類し、抽象度をあげて2

次コードを抽出し、サブカテゴリーを構成した。そして、サブカテゴリーからさらにカテゴリーを生成した。

面接実施期間中やデータ分析過程で、データの解釈が操作的で先入観に囚われていないかを研究者間で確認しながら検討を進めた。

なお、本研究は愛知県立大学研究倫理審査委員会に申請し、平成23年3月17日付（22愛県大管理第2-43号）で承認されて実施した。

III 結 果

1. 研究参加者の概要

研究参加者9名の年齢は、29歳から40歳の間にあり、平均年齢は35.1歳であった。また、第一子の平均年齢は32か月（2歳8か月）、第二子の平均年齢は7か月であった。職業は一般社員が6名、薬剤師、自営業、公務員が各1名であり、面接の平均時間は61.7分であった。

2. 二人目の子どもが生まれた男性の生活体験

二人目の子どもが生まれた男性の生活体験について、分析を行った結果、【仕事に対する取り組み方の変更】、【交友関係の変化に対する戸惑いと慣れ】、【時間的余裕のなさへの対応】、【人間としての成熟】、【子どもに対する理解とその増大】、【妻に対する理解とその増大】、【家計と居住問題への対応】の7つのカテゴリーとそれに付随する28のサブカテゴリーが抽出された。（表1）

以下に、それぞれのカテゴリーの内容について示す。なお、カテゴリーは【 】、サブカテゴリーは〈 〉、逐語録から抽出した具体的な語りの内容は「 」で示す。

1) 【仕事に対する取り組み方の変更】

二人目の子どもが生まれて、男性たちはこれまで以上に〈家族のために働く意欲が湧く・プレッシャーが増す〉ことを体験し、家族を養う中心的役割を担う人として、その責任や重圧を感じて止む無く〈仕事中心から家庭中心の生活に変えざるを得ない〉状況を体験していた。「やっぱり家族が増える（子どもが二人になる）ということは、それ以外の要素が入ってくる、子どもが調子が悪い時とか、妻の調子が悪い時とか、当然自分の思いと違う要因で自分の会社での働き方とかを変えるってことは当たり前になってきましたね。すごい忙しい時とか、あんまり残業して遅くなるわけにもいかないので、朝6時に会社に行って、夕方の6時には帰れるようにす

表1 二人目の子どもが生まれた男性の生活体験

カテゴリー	サブカテゴリー
仕事に対する取り組み方の変更	<ul style="list-style-type: none"> ・家族のために働く意欲が湧く・プレッシャーが増す ・仕事中心から家庭中心に生活を変えざるを得ない ・手放せない仕事は、質を落とさないように働き方を変える ・仕事の負担が出産前よりも増えて、妻の理解を得て仕事を優先せざるを得ない
交友関係の変化に対する戸惑いと慣れ	<ul style="list-style-type: none"> ・付き合いができにくくなり、それに対する迷い・葛藤・寂しさを味わう ・付き合いができなくなることでの仕事への影響や周囲の反応が気になる ・友人との付き合いがなくなったことの仕方なさや慣れが出てくる ・友人よりも家族の方が大事だと思うようになる ・職場や友人との付き合いが減って、子どもを含む他の人たちとの付き合いに置き換わる
時間的余裕のなさへの対応	<ul style="list-style-type: none"> ・全体的に時間的余裕がなくなった ・時間の使い方を工夫するようになった ・仕事と家事の調整を工夫する ・仕事よりも家族や子どもを優先するようになった ・将来の時間的余裕に期待する
人間としての成熟	<ul style="list-style-type: none"> ・これまで描いていた父親のイメージと現実の父親としての自分とのギャップに戸惑う ・父親役割を意識するようになった ・二人目の子どもゆえの慣れがでてくる ・子どもが増えてから、人に対する見方が寛大になった ・子どもが生まれてからの新たな自分・成長した自分に気づく
子どもに対する理解とその増大	<ul style="list-style-type: none"> ・上の子への配慮をするようになり、上の子との関係が深まった ・上の子の成長に対する発見や感動を強く感じる ・子どもと過ごす時間が楽しみや癒しになる ・二人の子どもを比較して、一人一人の存在に感動する
妻に対する理解とその増大	<ul style="list-style-type: none"> ・二人目が生まれてからの妻の育児の大変さを実感する ・妻に負担をかける申し訳なさや遠慮・感謝の気持ちが出てくるようになった ・妻への理解度が増す ・妻の大変さや子どもを見て、手伝う側としてではなく、自分からやるようになった
家計と居住問題への対応	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもが増えたことで将来の家計に不安が出現し、それを受け入れての計画を考えるようになった ・子どもが増えて、家屋や車を変更した

るって感じで、毎日4時起きしてってゆうことを1か月やっていたんですけど、こういうふうにして時間とかのやりくりを家族に合わせるっていうことはしたりしてましたね。」と語られ、子どもの病気や妻の負担度に合わせて、仕事をやりくりし、自分の生活の中心を変更してゆく様子がみられた。

そして、日々の仕事に対して〈手放せない仕事は、質を落とさないように働き方を変える〉ことについて「(子どもが二人になってから)ある程度手抜きをして部下とか後輩に仕事割り振って帰るようにしようとか……。結構自分は責任感じゃないですけど、今まで、自分一人で頑張ってきたというところもあるので、手放せないところもいっぱいあったんですけど、でもなんか、なるべく自分がやらなくていい方をやらないようにするっていうのを心がけるようになりましたね。」などのように、仕事の質を落とさないようにできるだけの努力を行っていた。そしてさらに〈仕事の負担が出産前よりも増えて、妻の

理解を得て仕事を優先せざるを得ない〉という状況にも出くわしていた。二人目の子どもを育てるこの年齢の男性の多くは、同時期に仕事の移動や負担が増えることが起こってくる。そのような状況で、妻の理解を得て仕事を優先せざるを得ない場合もあることが語られた。男性がさまざまな努力をしながら仕事を続けていく背景には、子どもが二人になったということの家族に対する自分の責任を一層強く感じ、仕事に対する意欲も高くなっていることが窺えた。

2) 【交友関係の変化に対する戸惑いと慣れ】

このカテゴリーに関する体験は〈付き合いができにくくなり、それに対する迷い・葛藤・寂しさを味わう〉という体験が語られ、それまでの仲間や友人との横の関係が減少することやそれに対する抵抗感や葛藤、仲間との距離が離れることの寂しさを味わっていた。そして、〈付き合いができなくなることでの仕事への影響や周囲の反

応が気になる)ことを体験し、「付き合い悪くなって、付き合い以外の仕事上に問題が出ると嫌だとかそういうのは考えましたね。(中略)誘われるわけじゃないですか。(でも)行けない、行けない理由を考えるのがなんかこう、独身の子たちからみるとなんで行けないの? って。そんなに、奥さんに頭上がらないんだ、って思われるのも嫌だになって。そういう方を考えますね。」などと語られ、自分自身の楽しみがなくなることだけではなく、そのことが仕事に影響するのではないかという心配や自分が周囲にどのように理解されるかということに気になっていた。しかし、そのうちに〈友人との付き合いがなくなったことの仕方なさや慣れが出てくる〉という状況に転じ、次第にそれが仕方ないと思えるようになり、自分の普通のことになってくることが語られた。そして〈友人よりも家族の方が大事だと思うようになる〉という変化で、今まで当たり前であった友人との付き合いよりも家族との時間を大事に考えるようになっていた。それらはまた、〈職場や友人との付き合いが減って、子どもを含む他の人たちとの付き合いに置き換わる〉という状況になっていくことが、「前までよく遊んでた人とはほんとに遊ばなくなりましたね。もう、一人目よりも二人目の方が、周りの交友関係っていうのは減っちゃいましたね。でも、また、家庭をもった人たちのコミュニティができてくるみたい……。」と述べられ、今までの友人関係が職場の中でもこれまではなかった二人の子どもをもつ人たちとの新たなつながりや、地域のコミュニティへの参加になっていた。

3) 【時間的余裕のなさへの対応】

このカテゴリに関する体験は、5つのサブカテゴリから構成され、〈全体的に時間的余裕がなくなった〉では、今までにはあった自分だけで楽しむ時間がなくなって、時間調整の困難ややりたいことが思うようにできないもどかしさを感じることも、また、自分の時間がなくなって子どもや家族に八つ当たりしてしまうことが出てきた。さらに、妻と二人だけの時間がなくなったことに、物足りなさを感じていることも語られた。そのような状況で、〈時間の使い方を工夫するようになった〉では、今までのような自分の時間はなくなったが、時間の使い方や他のことを効率よくできる方法を考えるようになったことが語られ、自分だけで楽しむ時間を確保するために、家事や育児などの家のことを自ら進んでやることで、妻に何も言われない状況を作っていること、妻との二人

だけの時間を意識して確保するような時間の使い方を工夫していることが語られた。そして、〈仕事と家事の調整を工夫する〉では、「料理は全くやりたくないの、やってもらってます。食事を作ってもらっている代わりに、それ以外のことをやるって感じですね。お風呂掃除とかやっていますね。」などと、自分のできる範囲で家事や育児をやり、家事や育児ができない代わりに仕事を頑張ったり、状況が変わっても妻との役割分担を調整したりしながら、仕事も家事もこれまでと同じように進むような対応の努力が語られた。

〈仕事よりも家族や子どもを優先するようになった〉では、二人目の子が生まれるまでは、仕事に対してプライドを持ち、仕事第一に考えていた人でも、子どもが二人になると男性もどちらかの子どもをみなければならぬ状況が増える。そして、妻だけに子どもを任せて負担をかけるのではなく、自然に男性自らが子どもの世話をする生活に変わっていったことが語られた。

そのような状況で男性は〈将来の時間的余裕に期待する〉と考えるようになり、「今はもう子育てをする時期と思わなきゃね、と嫁さんには言っているつもりなんだけど、今までも僕ら散々やってきましたし、二人で、海外旅行もすごい行ったのね。あそこよかったね、行きたいねって言うんだけど、お互い好きだから、まあそれはもうちょっと大きくなって、子どもたちもあんまり手がかからないようになったら、それからまた、楽しめるようにしたいね。」と語り、多くの男性が、今は自分の時間がないことや妻と二人だけの時間がないことに仕方なさを感じながらもそれを理解し、将来の子どもたちが成長した後に、子どもを含めて楽しめることを期待する考え方に替わってゆくことが語られた。

4) 【人間としての成熟】

このカテゴリに関する〈これまで描いていた父親のイメージと現実の父親としての自分とのギャップに戸惑う〉は、実際に自分が子育てをしてみて、自分が知っている父親や想像していた状況、理想的な父親像に現在の自分を重ね合わせ、ギャップや戸惑いを感じる場面に出くわすことが複数の男性から語られた。そのような経過の中でも現実の自分については、一層〈父親役割を意識するようになった〉ことを感じ、次第に〈二人目の子どもゆえの慣れがでてくる〉を体験していた。この内容では、育児や自分の睡眠に関する話について多くの男性が語り、一人目でイライラしたことでも二人目では気にな

らなくなり、生活リズムに関するトラブルが次第に解消してゆく様子や、一人目では何もかもが初めてであったが、二人目の育児では一人目を経験しているからこそ、必要なもの・不必要なものが判断でき、過去の経験が生かされることが語られた。そして、〈子どもが増えてから、人に対する見方が寛大になった〉では、「会社とかの人間関係の中でも、できて当たり前というふうには思わなくなりましたね。やっぱりできない子どもと接する時間が多いと、できないってことがスタートで、そこからどうやってできるようになっていくかっていうことを考えていけるようになりましたね。ダメダメな後輩を見ても、こいつダメだなんて思いながらもじゃあどういう風に教えたらできるようになるかなとか、いろいろ見方は変わりましたね。」のように、二人の子どもとのふれあいを通じて気づいたことが、仕事の場面で後輩の育て方や他の人との付き合い方として、反映されてゆく様子が語られた。

さらに、〈子どもが生まれてからの新たな自分・成長した自分に気づく〉では、「自分が成長させられているというか、自分が成長するのはすべて子どものため、他の誰かのために成長しているわけではないので、子どもを通して子どものために成長していると感じる。やっぱり子どもの成長と共にこちらの態度も変えていかなきゃいけないなって。下の子が生まれてすぐの時とかは、赤ちゃん返りして寂しい子どもを目いっぱい甘やかしてもよかったんですけど、もう下の子も10か月なので、そうするとまた違ってきますよね。」と述べられた。そのほか、二人の子どもを育てて、子育て上手になった自分に気がついたという語りや今までの自分とは違う自分に気づき、不思議な気持ちになったという自分自身に対する再発見や驚きの語り、家庭と仕事を両立するために考えることで、自分自身のレベルアップにつながるという前向きで、意欲的な気持ちの語りが見られた。さらには、子どもの成長に伴う接し方の工夫をするようになったり、自分が子どもの見本になれるようになりたいと考えるようになったり、新たな自分や成長した自分に気づいていく様子の語りが見られた。

以上のように、二人目の子どもが生まれてから、最初は自分自身の役割について戸惑いつつも、子どもと接してゆくなかで親としての自分を考え、子どもを通して学び、自分を見つめ、問い直すことで、自分自身の変化や成長に気づいていくことが示された。このカテゴリーでは、起こった出来事をプラスに捉えてゆこうとする男性

の成長の姿が如実に表現されていた。

5) 【子どもに対する理解とその増大】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリーから構成され、〈上の子への配慮をするようになり、上の子との関係が深まった〉では、下の子が生まれて、今まで上の子だけの母親だった状態から、母親が下の子に関わるようになって寂しそうな上の子に対して、父親として何かしてあげたいという新たな気持ちが芽生えてくることが語られた。また、男性の多くは、下の子が生まれて上の子の担当になって上の子と一緒に外へ出かける機会が増え、それにつれて上の子と共に過ごす時間の楽しさを感じてゆく様子が語られた。上の子が自分に対しても喋り出してくるなどが、一層上の子に対しての愛着が強まる場面となることが語られた。それは、〈上の子の成長に対する発見や感動を強く感じる〉ようになることについて「初めて3歳になってお母さんと離れて、僕と二人での生活になるんで、その時は毎晩のように泣いていましたけど、3歳にしてこの状況をもうしょうがないんだって、この一週間は生活しなきゃいけないんだってという時の、お兄ちゃんの姿を見ると、……泣いてくるというか、3歳でこの状況を受け入れなきゃいけないって、うまく言葉で言い表せないんですけど、なんか、今でも思い出すとジーンとくるというか、なんか思いますね。」と、上の子の成長を実感する場面に感動することが多く語られた。そしてそれは、男性にとって〈子どもと過ごす時間が楽しみや癒しになる〉ことで、二人の子どもと過ごし、子どもたちの関係を見ていることが、自分にとっての癒しになっていることが語られた。

また、〈二人の子どもを比較して、一人一人の存在に感動する〉では、「二人目が生まれて、一人目の時より驚きが少ないんですよ。寝返りうっても、おっ寝返りうった！ って確かに驚くんですけど、一人目の子が寝返りうった時よりも多分驚いてないと思うんですよ。ただ、その代わりに比較して見ているわけじゃないですか。そういえば、上の子はこんな感じだったとか、比較して新たな発見がある。で、一人目の時と逆に照らし合わせて、この子の時は後頭部がいやに剥げてるけど、上の子の時はこんなことあったかなって。よくよく考えてみたら、体型とかひっくり返る時期とか早かったかもしれないって比較する対照があるから、この子と比較することで、さらにわかることがある。だから、二人目の子が何かって発見するんじゃなくて、二人目の子がいて、一人

目の子の時はどうだったかって反すうしてみても、そこから返ってくる情報から見て、どっちかに発見があるっていうのはありますね。」などと、二人の子どもの違いからそれぞれの存在や新たな発見などの気づきをしていた。

このカテゴリーは、二人の子どもと過ごす時間を通して、子どもからの癒しや感動を受け取り、子どもを通しての発見や楽しみを得るといって、今まで感じなかった新しい気持ちが芽生えてゆくことが表出されていた。

6) 【妻に対する理解とその増大】

このカテゴリーは、4つのサブカテゴリーから構成され、〈二人目が生まれてからの妻の育児の大変さを実感する〉は、平日の昼間は、自分は仕事でわからないが、妻が一人で外出した時に初めて自分一人で子ども二人の面倒をみることを経験した場面から、妻の子育ての大変さを初めて実感し、妻の状況に目覚めてゆく様子が語られた。そして、それは〈妻に負担をかける申し訳なさや遠慮・感謝の気持ちが出てくるようになった〉につながっていた。それらは、妻にお願いして自分だけが自由な時間をもらっているのに、妻にはその時間がなくて申し訳ないと感じる様子や、男性が仕事をしている間、妻は一人で二人の育児をしていることに、言葉には出さないが感謝しているという気持ちとして語られた。それは〈妻への理解度が増す〉となり、男性自身も自分の自由な時間を削ったり、早く家に帰るようにしたりして、妻の負担を軽くするような努力の変化がみられた。そして、時間がないなかでも妻との時間を作ることに努め、お互いの理解度が増してゆく様子が語られた。さらに〈妻の大変さや子どもを見て、手伝う側としてではなく、自分からやるようになった〉では、「掃除・洗濯・お皿洗いとかは結構やること増えましたね。やるようになったというか、今まで一人目の時とか子どもいない時とかは、半々とか、妻が疲れててしんどそうな時とかは、じゃあやろうか？ みたいなだったけど、自分はお手伝いする側っていうことが、二人目が生まれると基本的に自分がやらないといけなくなってきたね。」など、二人目の子が生まれるまでは、妻の手伝いをするという認識であったが、子どもが二人になることによって、自ら率先して家事や育児をやるのが普通のことと考えようになったことが語られた。

7) 【家計と居住問題への対応】

このカテゴリーは、2つのサブカテゴリーから構成された。〈子どもが増えたことで将来の家計に不安が出現し、それを受け入れての計画を考えるようになった〉では、「共働きの時は、全然、独身の時とほぼ変わらないくらい（お金を）使うんですよ。まあ無計画なんで、若い頃って、家賃が払えればいいじゃんって、二人で外食できればいいじゃんって、そういうレベルだった。あとは自分の好きに使っちゃう。でも、家族4人になって、自分だけの収入になると、じゃあ貯蓄をしないとって……。どこが削られるかって言ったら旦那の小遣いが一番削られるんですよ。まあ、一番支障がないって、しょうがない、慣れです、慣れ。」のように子どもが増えて、小遣いが減ることを受け入れ、将来に向けて貯蓄を考える等、計画を立てた生活になることが語られた。〈子どもが増えて、家屋や車を変更した〉では、家族人数が3人から4人になることで、車や家が狭くなり、車を買って換えたり、引越しをしたりすることが語られ、それに伴う出費など、経済面についてこれまでとは異なる考え方に切り替えてゆく様子が示され、問題が生じて柔軟に対応している様子が語られた。

IV 考 察

1. 二人目が生まれてからの職場や仕事に関する男性の体験

今回、二人の子どもを育てる男性の職場や仕事に関する考え方は、【仕事に対する取り組み方の変更】の体験に表出された。子どもが増えることでの家族への責任とプレッシャーを感じつつ、仕事への意欲が増し、働き方を変える工夫などで仕事に取り組む様子が語られた。

内閣府の世論調査⁶⁾によれば、「仕事」と「家庭生活」をともに優先したいと答えた男性の割合は、女性よりも高く、現状においても「仕事」と「家庭生活」をともに優先していることも、30歳代から50歳代の男性で最も高くなっている。さらに、岡本の研究⁷⁾による男性が育児に関われない理由では、40%の男性が仕事を優先していることをあげており、育児では仕事を休みにくい、休むことは論外であるという現状が報告されている。また、第一子が生まれた時の父親の働き方は「これまでと変わらない働き方をする」⁸⁾となっていることも報告されている。しかし、今回の結果では、子どもが二人に増える時点で、それが変化することが見えてきた。今回の男性

たちは、仕事を休むことが難しい状況でも、働き方を変える、や、仕事中心から家族中心の生活に変えざるを得ない状況を述べており、男性の仕事と家庭を両立したいという考えが、平成19年の27.7%から、平成21年には31.2%に変化⁸⁾してきていることに関連するような状況がみられていた。今日、女性のワークライフバランスが強調される一方で、男性においても二人目の子どもが生まれた場合は、仕事中心から家庭中心の生活に変えざるを得ない状況に置かれることが明らかになった。しかしながら、このような男性の状況にもかかわらず、一般的には、周囲からも「二人目の子ども」は一人目の反復としてしか理解されない傾向にあり、当人でさえも現実には直面するまでは、その違いを意識してないといえる。今回の結果でも、これまでの変更を迫られる場合や諦めに至る過程で、思いがけない現実気づくこととして表出され、実際には、一人目の子どもの時とは異なる予想していなかった大変さを体験していた。

核家族の多い現在、複数の子どもの育てる家庭の真の支援のためには、二人の子どもの育てるこのような状況について、理解を深めることが重要といえる。

また、【交友関係の変化に対する戸惑いと慣れ】で示された内容では、今回の参加者のほとんど全員が、職場や友人との付き合いが減っていくことを語った。男性心理に関する見解では、多くの人は、仕事から私生活の移行をスムーズにするために、労働のストレスや疲労を洗い流すような『儀式』（例えば仲間と飲みに行くこと、帰宅直後のくだらないテレビ番組を観ることなど）をする⁹⁾と述べられている。付き合いはそうした気晴らしの機会として、日本社会でも習慣化していると考えられ、これまで労働のストレスや疲労を家庭外で発散しているような対処行動が身につけている男性にとって、二人目の子どもが生まれたことによる交友関係の変化は、大きな戸惑いになっていることがわかった。また、これまでの付き合いを断ることで、周りの独身者の目を気にすることが語られた。このことは、仲間意識や職場への帰属意識が強い日本社会⁶⁾で働く男性の実態が、垣間見える結果といえる。さらに、育児よりも仕事を優先する社会一般の考え方や男性自身のそのような囚われが、まだまだ根強いこととして、交友関係の変化に対して戸惑いを感じる体験となっているといえ、これらの現実を見据えた育児支援の取り組みが必要であろう。

一方で、【人間としての成熟】に見られたように、子どもと接するを通して、男性は「できなくて当たり前」

という人間の見方に気づき、後輩の指導や対人関係の新しい側面を見出してゆくことが語られた。また、子どもの目線で物を見ることや、妻の大変さを実感する体験からは、自分自身に対する気づきやそれを契機に他者の存在や関わり方を見直してゆくことにつながっていた。

これらのことも職場における同じ子育て世代における立場の共有や人間関係の形成に、二人の子どもをもつことで部下の見方が変化することや自己の成長を認識することなどとして影響を及ぼしたことが明らかである。

2. 二人の子どもをもつ一人の人間としての成長

【時間的余裕のなさへの対応】では、子どもが二人に増えることで、研究参加者のほとんどが、自分だけの時間や妻と二人の時間、友人との交流時間がなくなることを語った。そして、そのような状況で時間の使い方を工夫し、自分だけの時間や仕事よりも家族を優先する生活に変更するを行っていた。「人はその人生の中で何かを選択し特殊化していく一方で、別の選択肢を失っており、獲得と喪失を繰り返して生活に適応していく (Balets, 1987)」¹⁰⁾とされている。また、他の研究でも、趣味の活動や友人との付き合いは、第一子が生まれた時に「子どもを含めて家族で楽しむ」ことに変化してゆく⁸⁾と報告されている。第一子でそれらを体験していなかった人でも、第二子では一層その傾向が進み、子どもを介した地域での仲間やそのような活動に参加することで、自分自身の失った時間が、また別の場面での時間に置き換えられてゆく様子が見えて、男性の生活範囲の拡大や変更が生じていることが確認できた。

また、男性は下の子どもが生まれたことにより、上の子どもと接する機会が増加する。このことは、小島の研究¹¹⁾でも、年長の児への関わりは父親が母親よりも多く受け持つ場合が多い、として報告されている。今回の男性たちは、これまでにはなかった上の子と接する機会を通して、上の子や周囲の出来事を子どもの目線で見ることによって、上の子が今までできないことができるようになっていくプロセスに気づくようになっていた。さらに、そのようなことから自分自身を見つめ、問い直す機会にしながら、子どもの見本になりたいと考えるようになっていた。また、日々の生活の中での工夫や問題解決に迫られることが多くなることから、そのような機会が自分のレベルアップになっていると知覚する場面も見られた。これらのことは、〈子どもが増えてから、人に対する見方が寛大になった〉や〈上の子の成長に対する

発見や感動を強く感じる)として表現され、わが子という身近な存在を通して、世界観が変化してゆく様子が窺えた。これらは、Eriksonが述べている「世話をする」、「はぐくむ」ことからの発達¹²⁾を今まさに生きている二人目の子どもが生まれた男性の生活状況といえる。

また、二人目の子どもが生まれた男性の多くが、上の子どもとのふれあいが、わが子と正面から向き合う機会になって、子どもからの学びや感動を得ていた。それは、男性にとっての学びの場面でもあり、癒しにもなっていることが語られた。このような場面は、男性の実感を伴う体験であるが、その実感を得た時に、初めて気づく喜びや楽しみをわが子と共有することでもありうる。出産は女性にとって確実なわが子の存在を知る体験であるが、男性にとっては、このような子どもとの実感の積み重ねが、次第に子どもの父親になってゆく過程を形成していくのかもしれない。

3. 妻に対する考えや家長としての考え

今回、子どもが増えることによって男性は、家族に対する責任やそのことが仕事への意欲につながるが見られたが、〈妻に負担をかける申し訳なさや遠慮・感謝の気持ちが出てくるようになった〉や〈妻への理解度が増す〉という体験があった。男性は、妻の不在場面で初めて二人の子どもの世話を体験し、日頃の妻の状況を理解することになっていた。そして、〈妻の大変さや子どもを見て、手伝う側としてではなく、自分からやるようになった〉という変化が生じていた。

安藤は、男性の育児参加について、男性が母親化して妻と育児で張り合ったりするのではなく、子どもとの時間を積み重ねて、自分なりの父親として育児を楽しむこと¹³⁾を述べている。本研究の結果では、この考え方に一致し、育児への参加ではなく、主体者として男性自らが育児を行う事実が明らかにされた。さらに、妻との関係の再構築や子どもの存在によって起こりうる、同じ境遇の人とのつながりや新たな社会の展開が、子どもが二人になることによる実像として、一段と広がっていくことが見えてきている。

また男性は、家族が増えることによる家屋や車などの経済的な将来計画についても、一家を支える立場として、それまでとは違った責任や自覚が生じることが今回の結果から確認された。

以上のことは、一人の子どもでは生じなかった二人目の子どもの出生によってもたらされた男性の体験であっ

た。男性は、子どもが二人になって止む無く生じた上の子どもとのふれあいを通して、子どもとの時間を楽しみ、癒され、学ばされる機会を得ていた。さらに、仕事や家庭の調整を行うなかで、生活範囲を拡大し、工夫をすることで自分の成長につながることを自覚していた。これらの多くは、二人目の子どもをもつことによってこそ得られた体験ともいえる。子どもを育てることが、すべての人にとって、このような体験になるような社会の土壌とシステムの開発が求められる。

今回の対象者は一地域内の子育て支援に参加された方に限定しており、職種、職位、生活スタイルのばらつきが多様であった。したがって二人目の子どもをもつ男性の全体を代表としているものではない。さらに今後は、異なる地域や職種の限定など対象者を考慮し、検討を進めていきたい。

また、今回の結果から判明した男性自身の考えや体験は、同じ状況にある男性間で共有するなど、これから二人目の子どもをもとうとする時期に向けての、母親学級や両親学級における予期的指導に役立てたりすることができる。

V 結 論

本研究では、第二子出生後、二人の子どもを育てる生活の中で、男性がどのような体験をしているのかを明らかにすることを目的として、二人の子どもをもつ研究参加者9名に面接調査を実施した。その結果、【仕事に対する取り組み方の変更】、【交友関係の変化に対する戸惑いと慣れ】、【時間的余裕のなさへの対応】、【人間としての成熟】、【子どもに対する理解とその増大】、【妻に対する理解とその増大】、【家計と居住問題への対応】が生成され、それらに属する28のサブカテゴリーを抽出した。男性は父親という役割を意識しつつ、子どもと関わりながら一人の人間として、自らも成長していることが明らかとなった。

謝 辞

今回の調査にあたり、二人の子どもを育てている生活について、ありのままを語ってくださった9名の方々に、感謝と御礼を申し上げます。

文 献

- 1) 森田亜希子, 森恵美, 石井邦子: 親となる男性が産後の父親役割行動を考える契機となった妻の妊娠期における体験. 母性衛生, 51(2): 425-432, 2010
- 2) 福丸由佳, 中山美由紀, 小泉智恵他: 妊娠期の妻を持つ夫の仕事役割の状況と妻へのサポートとの関連. 母性衛生, 47(1): 180-189, 2006
- 3) 村本淳子, 東野妙子: 母性看護学 I 妊娠・分娩. p. 32, 医歯薬出版, 2006
- 4) 林ひろみ, 大月恵理子, 森恵美: 初めて児の誕生にともなう父親役割行動の調整過程に関する研究. 日本母性看護学会誌, 4(1): 30-37, 2004
- 5) 国立社会保障・人口問題研究所: 人口統計資料集 IV. 出生・家族計画 表4-17 出生順位別平均出生年齢, 2011 2011/12/3, <http://www.ipss.go.jp/syoushika/tohkei/Popular/Popular2011.asp?chap=4&title1=%87W%81D%8Fo%90%B6%81E%89%C6%91%B0%8Cv%89%E6>
- 6) 内閣府: 男女共同参画局 男女共同参画社会に関する世論調査, 2009 2012/1/2, <http://www8.cao.go.jp/survey/h21/h21-danjo/2-2.html>
- 7) 岡本絹子: 1歳6か月児をもつ父親の父親としての自己評価と生活状況. 吉備国際大学保健科学部紀要, 10: 29-36, 2005
- 8) 厚生労働省: 子育て支援策等に関する調査研究, 2003 2012/1/9, <http://www.mhlw.go.jp/houdou/2003/05/h0502-1a.html>
- 9) Lehmann, Wolfgang E: 新田健一(訳) アダム・コンプレックス—自己発見のための男性心理学—. 勁草書房, 1995
- 10) 森下葉子: 父親になることによる発達とそれに関わる要因, 17(2): 182-192, 2006
- 11) 小島康生: 外出中の家族を対象とした親子の関わりと夫婦間の役割調整—子どもが1人の家族と2人の家族の比較を通して—. 家族心理学研究, 15(1): 25-34, 2001
- 12) 大西和子: 成人看護学概論. pp. 36-47, ヌーヴェルヒロカワ, 2009
- 13) 畑中都名子: いのちをつなぐ人たち⑧. 助産雑誌, 66(8): 635-639, 2012